

石窟石龕

1569年に阿弥陀寺を創設したのち、弾誓上人は自らの死期が近いことを悟ると寺のすぐ後ろの急な崖に洞穴を彫るように弟子たちに指示しました。

洞窟の入り口は普通の人間が歩いて通れるくらい広く、その内部はさらに大きくくなっている。壁は粗く刻まれていて、岩肌を水が流れ落ちている。

洞穴の真ん中には石の霊廟がある。弾誓上人は自らの宗派をつくり、日本の封建社会における最下層の人々を教え導くことを選びました。

1613年、62歳の弾誓はこの洞穴に入り、祈りと断食を開始した。彼は寺の弟子に、いくつかの空気穴を残して穴の入り口を封じるように命じた。

弟子たちは弾誓が念仏を唱える声が聞こえなくなってから3日後に空気穴を閉じました。弾誓は、自分の行動が、のちにこの墓所を訪れて礼拝することになる人々を救うことになると考えていた。

すべての人々の救済を願いながら厳しい修行の末、瞑想しながら絶命し、その体がミイラ化した者が「即身仏」と呼ばれる。明治時代（1868～1912年）に、この地下室を開けて、弾誓の亡骸を埋葬するように求める提案がなされた。しかし、入り口が開けられると、弾誓の遺骸は完全にミイラ化していたので、その遺骸は新しい霊廟に納められることになった。

墓所の広さは約1.5平方メートルで、訪れた人は中に入り、祈りを捧げ、供物を供えることができる。